

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19790815

研究課題名 (和文) 生体肝移植における生体ドナーの精神状態に関する研究

研究課題名 (英文) Psychological status of LDLT(living-related liver transplantation) donors

研究代表者

林 晶子 (AKIKO HAYASHI)

京都大学・医学研究科・助教

研究者番号：70378636

研究成果の概要：

平成19年7月から平成20年3月まで計54名の生体肝移植ドナーに術前、レシピエントとの関係、ドナーになるに至った動機・過程・葛藤の有無、手術に対する不安についての半構造化面接、CMI健康調査票(身体状態)、SF-36(身体状態のQOL)、TAS-20(アレキシサイミア)、STAI(不安)、BDI(抑うつ)に関する心理テストを施行した。術前の身体症状がうつ状態の一症状である可能性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	1,000,000	0	1,000,000
平成20年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	150,000	1,650,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：内科系臨床医学・精神神経科学

キーワード：精神病理学・移植外科学

1. 研究開始当初の背景

年々目覚しい移植医療技術の発達により、生体肝移植のレシピエントの適応年齢や適応疾患が広がっている。ドナーの適応条件も広がり、ドナー候補が増える一方であるが、移植術がドナーに与える精神医学的・心理学的

影響については結論が出ておらず、どのような因子がドナーの精神・心理状態に関与しているのかについてはほとんど研究がなされていない。これまでの研究では生体臓器移植のドナーの術後の精神状態については多くは良好とされてきた(W.G.Olson,2001, Singer 1989)。また術後のQOLについても、

健常者と有意差がない (Karliova et al., 2002) 項目によっては健常者より良い (Trotter et al., 2001)、術前に比べて術後はさらに良くなる (Pscher et al.,) などの報告がある。肝移植ではドナーに術後合併症が高頻度で生じるが、この合併症の有無も QOL に影響しないという報告もある (Miyagi et al., 2005, Walter et al., 2003)。一方、一部のドナーには術後の精神科的問題が指摘されている。福西らは術後1ヶ月で10%のドナーが Depression と診断されたと報告している (2002)。Walter (2002) らは術後6ヶ月の時点で26%のドナーに疲労感、下肢痛が認められたと報告し、日本肝移植学会による調査 (2005) でも術後1年以上でドナーの15.7%に易疲労が、5.6%に腹痛がみられるとしており、また Schluger らは手術から平均280日後で56.7%に痛みあるいは胃腸症状を認めたと報告している。Walter らは術後にみられる疲労感や下肢痛について Depression の身体症状である可能性が高いと指摘しており、他の報告でみられるドナーの身体症状も同様に Depression の身体症状である可能性がある。また術前のドナーの9.7%にアレキシサイミア (失感情症) が見られるとする福西らの研究 (2002) がある。このアレキシサイミアは心理的ストレス下での2次的な反応が含まれると考えられ、これが術後の身体症状の要因として作用している可能性もある。また、これら術後の精神状態を左右する因子としては、術前の「怒り」と相関するという研究 (Walter et al., 2002)、があるが、それ以外にはほとんど縦断的な研究がなされていない。術前のさまざまな因子から術後の精神状態をより正確に予測することができれば、術後の精神科的問題にもより適切に介入することができると考えら、縦断的な研究は不可欠である。2001年11月から2003年7月まで京大病院で生体肝移植を行った16歳以上のドナー (67名) を対象にしたわれわれの研究では、術前の心理状態は臓器提供の動機および意思決定の過程によって相違が見られ、またドナーの葛藤の有無によっても心理状態に違いが見られた。この研究では現在、術後3年から5年目にあたって、術前と同様の心理テストを施行し、術前の因子との関連を調べている段階であるが、身体症状について考慮されていない点、術後数年経ってしまったために、精神症状への生体肝移植手術の影響が明らかにしにくい点、術後の調査が郵送法によるために得られる情報が限られる点などにおいて精密さに欠ける。したがって、これらの点を改善した研究を試みる必要があると考えられた。

2. 研究の目的

生体肝移植術を受けるドナーについて次の点を明らかにする。1) 移植術前、術後6ヶ月後、1年後それぞれにおける抑うつ・不安状態、身体症状、身体的 QOL、アレキシサイミアスケールの変化、2) 移植術のドナーになるにあたっての動機・過程・葛藤の有無、3) 移植術前後でのレシピエントとの関係の変化、4) 1) の変化に対する2) と3) の関与。また術前・術後 (6ヶ月後、1年後) のドナーに対する半構造化面接の質的解析を行う。

3. 研究の方法

<平成19年度>

京都大学医学部附属病院において生体肝移植手術を施行される16歳以上のドナーに対して、移植手術直前 (術前7日から前日) に精神医学的診察を行う。心理学的面接が可能と判断された患者に対して心理学的半構造化面接を行い、抑うつ・不安状態について問い、生体腎移植の研究で Simmons ら (1977年) が用いた方法で、レシピエントとの関係、ドナーになるに至った動機、過程、葛藤の有無について分類、また身体状態についても問う。同時に以下のテストを施行する: CMI 健康調査表 (身体状態)、SF-36 (身体状態の QOL)、TAS-20 (アレキシサイミア)。抑うつ・不安状態についてはそれぞれハミルトン抑うつ評価尺度、ハミルトン不安評価尺度を用いて評価する。術後、6ヵ月後と1年後のドナーの外来受診時に心理学的半構造化面接を行い、レシピエントとの関係の変化、身体症状の有無とその変化について問い、同時に CMI、SF-36、TAS-20 を行い、ハミルトン抑うつ評価尺度、ハミルトン不安評価尺度を施行する。対象となる生体移植術は、年間100件であり、対象ドナーは約100名となる見込みである。

<平成20年度>

生体肝移植ドナーの術直前、術後6ヶ月後、1年後の評価は平成19年度より引き続き継続すると共に得られた結果について統計処理を行う。

4. 研究成果

平成19年7月より生体肝移植術における生体ドナーに対する術前の精神医学的面接、心理テストの実施を開始した。平成20年3月までに緊急手術により心理テストの施行ができなかった1例を除く54例のドナーより研究の協力が得られた。前回我々が行った研究(Transplantation 2007;84:1255-1261)では回収率が73.6%であったことに比し、今回はほぼ100%に近い良い回収率が得られている。いずれのドナーも1時間30分ほどを要して精神科医による半構造化面接を行い、レシピエントとの関係、ドナーになるに至った動機・過程・葛藤の有無、手術に対する不安について聴取するとともに、CMI健康調査票(身体状態)、SF-36(身体状態のQOL)、TAS-20(アレキシサイミア)、STAI(不安)、BDI(抑うつ)に関する心理テストを施行した。心理テストの結果では、STAI-S(状態不安)の結果が平均46.6(±11.0)、STAI-T平均39.3(±11.6)、(BDI(抑うつ)平均7.5(±8.67)となった。状態不安、抑うつに関しては以前の研究の結果よりも有意に高い値であり、本研究では精神科医による面接を病室ではなく精神科診察室で行っていること、手術の前日ではなく、ドナー候補として確定して間もなく行っているという状況などが関与していると思われる。CMIの結果では身体状態がBDIと相関するというデータが得られ、身体症状がうつ病の身体症状であるとした仮説を裏付けるものとなった。SF-36、TAS-20に関しては、詳細な解析を行っているところである。半構造化面接の結果得られたドナーになる動機・過程・葛藤の内容が前回よりも多岐にわたるため、引き続き症例を集めて質的な解析も検討する必要があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 晶子 (AKIKO HAYASHI)
京都大学・医学研究科・助教
研究者番号：70378636

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

